

平成22年 5月27日現在

研究種目： 基盤研究 (B)
 研究期間： 2006～2009
 課題番号： 18320050
 研究課題名 (和文) ドイツ近・現代文学における〈否定性〉の契機とその働き
 研究課題名 (英文) Das Moment der „Negativität“ und seine Funktionen
 in der deutschen modernen Literatur
 研究代表者 小黒 康正 (OGURO YASUMASA)
 九州大学・大学院人文科学研究院・教授
 研究者番号： 10294852

研究成果の概要 (和文)：ドイツ現代文学は、言語に対する先鋭化した批判意識から始まる。とりわけホーフマンスタール、ムージル、カフカの文学は、既存の言語が原理的機能不全に陥っていることを確信しながら、言語の否定性を原理的契機として立ち上がっていく。本研究は、ドイツ近・現代文学の各時期の代表的もしくは特徴的な作品を手掛かりとして、それぞれの作品において〈否定性〉という契機の所在を突き止め、そのあり方と働きを明らかにした。

研究成果の概要 (英文)：Im deutschsprachigen Raum begann die literarische Moderne mit einer zugespitzten Sprachskepsis, dass die bisherige Sprache prinzipiell versage. Unser Forschungsprojekt setzte sich mit der literarischen „Negativität“, vor allem bei Hofmannsthal, Musil und Kafka, und den Vor- und Nachstufen in der deutschen Literatur auseinander.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	3,200,000	0	3,200,000
2007年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2008年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
総計	9,300,000	1,830,000	11,130,000

研究分野： 人文学
 科研費の分科・細目： 文学・ヨーロッパ文学 (英文学を除く)
 キーワード： ドイツ文学、否定性、ホーフマンスタール、ムージル、カフカ
 ゲーテ、クライスト、ベンヤミン

1. 研究開始当初の背景

「否定性」の問題は、神学および哲学の領域においては、長い研究史、論争史をもっているが、文学研究の領域においては、「墮罪」モチーフや「英雄」モチーフを扱う研究の一部分で、または、「ニーチェの言語批判」や「ホーフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』について」といった単発的なかたちで論じられるのが常であった。「否定性」をめぐ

ぐる総合的な文学研究は、本研究を除き、日本のみならず、ドイツ本国においても、いまだ前例がない。

2. 研究の目的

本研究では、否定性 (Negativität) を文学が成立する原理的契機として捉え、この観点から、ドイツ近・現代文学の各時期の代表的もしくは特徴的な作品を手掛かりとして、それ

ぞれの作品において〈否定性〉という契機の所在を突き止め、そのあり方と働きを明らかにしようとした。なお、研究遂行上、特に留意したことは以下の4点である。すなわち、(1)「否定性」を文学そのものの原理的問題として捉えながらドイツ近・現代文学を全体的かつ個別的に考察し、(2)神学的・哲学的思想と文学的思想を意識的に関係づけると同時に、認識の否定性と言語の否定性とを連動している問題として検討し、(3)この理論的側面と実際の側面とを相互規定的もしくは相互修正的な関係において捉え、(4)「否定性」のあり方と働きの連関を「我々の問題」として叙述することであった。

3. 研究の方法

本研究は、大前提として基本的に文献学の方法に拠りつつ、その上で(1)哲学・思想、美学、言語論、メディア論、身体論、表象論、ジェンダー論、文芸理論、演劇論、モチーフ研究などの多様な観点多様な観点到に留意し、同時に(2)共時的視点と通時的視点とが縦横に交差する共同研究を目指した。その際、特に留意した点は、九州大学大学院人文科学研究所に所属する浅井、小黒、東口の3人が哲学・思想、文学、美学の理論的観点から問題を総括するいわば横軸の役割を担い、その他のメンバーが文学・思想史上の特定の時代もしくは作家を扱ういわば縦軸の役割を担うように心がけたことである。このような巨視的かつ共時的視点と微視的かつ通時的視点との交差こそ、本研究がめざした理念的な研究方法であったと言えよう。

九州大学文学部にて9月と2月の年2回、各3日間の計画で開催した研究会では、予め毎回異なる時代もしくは問題領域を設定し、担当者が当該の課題に基づく研究を発表し、報告後、参加者全員で討議を行い、平成18年度には問題点の共有化を、平成19年度以降には問題点の深化をはかった。最終年度の研究会は1回のみで開催だったので、4年間で合計7回行ったことになる。

その内、第三回と第五回研究会では、ゲーテ研究の第一人者である柴田翔・東大名誉教授による「ゲーテ文学における〈否定性〉と〈肯定性〉」についての講演があった。柴田氏とともに「肯定性」という新たな観点をめぐり活発な議論を行ったことは、本研究にとって、重要な進展だったと言えよう。また、第四回と第六回研究会には、ドイツ語母語者三名による研究発表があり、問題の更なる展開を目指すために、ドイツ語による多角的な議論を重ねることができた。

4. 研究成果

以上の結果、本研究はドイツ近・現代文学における「否定性」を手掛かりとして文学の

新しい捉え方を提示するに至った。研究成果は以下の三点にまとめることができる。

- (一) ドイツ文学は、言語批判的な意識が先鋭化した19世紀末以降、言葉の原理的機能不全性という問題意識に主導されながら、「言語の否定性」を強く自覚した「否定性の文学」へと変貌する。このような新たな展開は、その思想的背景をニーチェ、マウトナー、ベンヤミンの言語批判論に持ち、その具体的な実作はホーフマンスタール、ムーゼル、カフカの文学に認められる。
- (二) 言語の否定性をめぐる問題意識は、トーマス・マン（特に自己イロニーの問題や『ファウスト博士』、表現主義や新即物主義、第二次世界大戦後の文学（特にインゲボルク・バツハマン）を経て、今日にも受け継がれてきた。その結果、ドイツ現代文学では、例えばヘルタ・ミュラーの文学に認められるように、言語ならざる「沈黙」に言葉を与えることで、饒舌な「沈黙」を現出させようとする矛盾が繰り返し試みられるようになったと言えよう。
- (三) また、認識・表現という「ロゴス」概念の二重性に即して考えるならば、「言語の否定性」に符合するものとして、人間がなす認識の原理的機能不全性、すなわち「認識の否定性」が認められる。実際、「言語の否定性」が文学の主導原理となる以前は、シュトゥルム・ウント・ドラングおよびロマン主義の反啓蒙主義、クライストの「カント危機」および『マリオネット激情』、ビュヒナーのニヒリズム等に顕著に見られるように、多かれ少なかれ総じて「認識の否定性」に刻印されていたと言えよう。

以上を踏まえると、ドイツ近現代文学を、否定性を原理的契機として成立する文学、すなわち広義の「否定性の文学」と捉えることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計24件)

- ① 小黒康正 「「水の女」の黙示録 インゲボルク・バツハマン『ウンディーネ行く』をめぐって」、九州大学大学院人文科学研究所『文学研究』第107号(2010)、査読有、95-128頁。
- ② 小黒康正 「1811年の「翻訳」論——フケー『ウンディーネ』とクライスト『水の男とセイレン』——」、日本独文学会「ドイ

- ツ文学」第 138 号 (2009)、査読有、188-203 頁。
- ③ 東口豊「Th.W.アドルノの音楽言語論における「沈黙」、九州大学大学院人文科学研究 院「哲學年報」第 69 号 (2010)、査読無、253-281 頁。
- ④ 恒吉法海「Jean Pauls Politische Schriften」、かいろすの会「かいろす」第 47 号 (2009)、査読有、1-15 頁。
- ⑤ 小川さくえ「インゲボルク・バッハマンの両性具有性——『すべて』『ゴモラへの一歩』について——」、日本独文学会西日本支部「西日本ドイツ文学」第 21 号 (2009)、査読有、1-15 頁。
- ⑥ 坂本貴志「オルフェウスのバラード—ゲーテ、シラーとヘルメスの伝統—」、19 世紀学会「19 世紀学研究」第 4 号 (2010)、査読無、107-126 頁。
- ⑦ 坂本貴志「デモニシユなる自由」、日本独文学会「ドイツ文学」第 138 号 (2009)、査読有、108-122 頁。
- ⑧ 増本浩子「スイスにおける多言語・多文化主義」、神戸大学文学部紀要」第 37 号 (2010)、査読無、33-56 頁。
- ⑨ 北島玲子「言語を忘れることを夢見るとき——カネッティにおける言語の否定性をめぐって」、大阪大学ドイツ文学会「独文学報」第 25 号 (2009)、査読有、49-71 頁。
- ⑩ 北島玲子「境界をめぐって——カネッティにおける書くこと」、日本独文学会研究叢書」第 059 号 (2009)、査読無、64-78 頁。
- ⑪ 岡本和子「芸術的変換装置としての物語——C. プレンターノの『平和人形の入った箱』」、日本独文学会「ドイツ文学」第 138 号 (2009)、査読有、204-217 頁。
- ⑫ 小黒康正「トポス「水の精の物語」における妙書の饗宴——アイヒェンドルフ文学をめぐって——」、九州大学独文学会「九州ドイツ文学」第 22 号 (2008)、査読有、1-31 頁。
- ⑬ Arne Klawitter: Fiktionen des Intermediären. In: *Orbis Litterarum*. Bd. 63:2 (2008), S.89-109.
- ⑭ Arne Klawitter: Stil als diskursives Strategem. Verschwinden und Wiederkehr des Stils. In: *Stil, Stilbruch, Tabu*. Hg. von Matthias Rothe und Hartmut Schröder, Berlin: LIT Verlag 2008, S.52-67.
- ⑮ Eva Ottmer: „Es ist der Tod, den du als Geist verkündest!“. Der mittelalterliche Tod als Leitmotiv in Thomas Manns Drama *Fiorenza*. In: Neue Beiträge zur Germanistik. Internationale Ausgabe von „Doitsu Bungaku“. Hrsg. von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. Tokyo: Iudicum 2008, S.27-39.
- ⑯ 福元圭太「マッハとホフマンスタールの「瞬間」—文学的一元論と言語に関する試論—」、九州大学大学院言語文化研究院「言語文化論究」第 23 号 (2009)、査読無、1-16 頁。
- ⑰ 杉谷恭一「タンホイザーと〈ヴァルトブルク〉の欺瞞」、熊本大学「文学部論叢」第 98 号 (2008)、査読無、5-34 頁。
- ⑱ 坂本貴志「『視霊者の闕』—「魂の不死性」を巡るシラー、カントの問い」、山口大学「独仏文学」第 29 号 (2008)、査読有、45-78 頁。
- ⑲ 桑原聡「アイヒェンドルフ文学の二重構造」、日本アイヒェンドルフ協会「あうるら」第 24/25 号 (2007)、査読有、5-18 頁。
- ⑳ 浅井健二郎「(詩作されてあるもの)の射程」、河出書房新社『道の手帳「ベンヤミン」』(2008)、査読無、80-84 頁。
- ㉑ 小黒康正「忘却と想起——『魔の山』におけるディオスクロイ——」、日本独文学会研究叢書『トーマス・マン『魔の山』の「内」と「外」——新たな解釈の試み——』第 041 号 (2006)、査読無、17-29 頁。
- ㉒ 吉田孝夫「智・女・鏡—グライフェンベルクにおける第四の神性につ」、希土の会「希土」第 31 号 (2006)、査読無、2-27 頁。
- ㉓ 濱中春「Rhetorik des Erhabenen. Das Meer in Schillers Ballade *Der Taucher*」、日本ゲーテ協会『ゲーテ年鑑』国際版第 48 号 (2006)、査読有、49-62 頁。
- ㉔ 岡本和子「ベンヤミンにおける子ども—言語と物」、大東文化大学紀要 人文科学」第 45 号 (2007)、査読有、64-78 頁。
- [学会発表] (計 10 件)
- ① 小黒康正「アンティポデーの闇——プレ ンターノ/ゲレス『時計職人ボックスの不 思議な物語』」、九州大学独文学会、2009 年 4 月 25 日、九州大学文学部。
- ② 福元圭太「フェヒナーにおけるモデルネ の「きしみ」」、平成 21 年度秋季日本独文 学会全国学会、2009 年 10 月 17 日、名古屋 市立大学。
- ③ 増本浩子「ドイツ語で書く<越境した> 作家たち」、海港都市国際学術シンポジウ ム (神戸大学・韓国海洋大学主催)、2009 年 11 月 26 日、クラウンプラザ神戸。
- ④ 桑原聡「近代ドイツ文学における庭園モ チーフについて—ゲオルゲ、ホーフマンスタール、シェアバルト—」、日本独文学会北 陸支部研究発表会 2009 年 11 月 7 日、新潟 クロスパル。
- ⑤ Yasumasa Oguro: Frieden und Krieg von 1811 – Fouqués „Undine“ und Kleists „Wassermänner und Sirenen“. Auf der Asiatischen Germanistentagung am 27. 08 2008. Kanazawa.
- ⑥ Haru Hamanaka: Ästhetik der Linie bei

Lichtenberg und Hogarth. Auf der Asiatischen Germanisten-tagung am 27. 08 2008. Kanazawa.

- ⑦ Hiroko Masumoto: Erkenntnistheoretische Überlegungen im Spätwerk Dürrenmatts. Im Humboldt-Kolleg Rikkyo 2008 am 15. 03 2008.
- ⑧ Haru Hamanaka: Gesicht – Bild – Wissen. Physiognomik in Lichtenbergs Hogarth-Erklärung. Im Humboldt-Kolleg Rikkyo 2008 am 15. 03 2008.
- ⑨ Satoshi Kuwahara: Mystisches Denken als eine interkulturelle Wissensform - Hermann Broch und eine ostasiatische Wissenstradition. Im Humboldt-Kolleg Rikkyo 2008 am 16. 03 2008.
- ⑩ 浅井健二郎、小黒康正他「ドイツ近代文学における〈否定性〉の契機とその働き」、日本独文学会 2006 年度秋季研究発表会シンポジウム (九州産業大学)、2006 年。

[図書] (計 5 件)

- ① 浅井健二郎編訳『カフカ・セレクション 3 一異形／寓意』、筑摩書房、2008、336 頁。
- ② 浅井健二郎、小黒康正他『ドイツ近代文学における〈否定性〉の契機とその働き』、日本独文学会研究叢書 051 号 (2007)、73 頁。
- ③ Arne Klawitter: Literaturtheorie und ihre Anwendung. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 2008, 304S.
- ④ 浅井健二郎編訳、岡本和子共訳『ベンヤミン・コレクション 4 批評の瞬間』、筑摩書房、2007、672 頁。
- ⑤ 恒吉法海編訳『ジャン・パウル中短編集 II』、筑摩書房、2007、539 頁。

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浅井 健二郎 (ASAI KENJIRO)
九州大学・大学院人文科学研究院・教授
研究者番号：30092117
(平成 18→20 年度のみ)

(2) 研究分担者

小黒 康正 (OGURO YASUMASA)
九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：10294852
(平成 18・19 年度：連携研究者、
平成 20 年度：研究分担者、
平成 21 年度：研究代表者)

(3) 連携研究者

東口 豊 (HIGASHIKUCHI YUTAKA)
九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：70346740
恒吉 法海 (TSUNEYOSHI NORIMI)
九州大学・大学院言語文化研究院・教授
研究者番号：60033354
福元 圭太 (FUKUMOTO KEITA)
九州大学・大学院言語文化研究院・准教授
研究者番号：60033354
杉谷 恭一 (SUGITANI KYOICHI)
熊本大学・文学部・教授
研究者番号：90040500
小川 さくえ (OGAWA SAKUE)
宮崎大学・教育文化学部・教授
研究者番号：80244185
坂本 貴志 (SAKAMOTO TAKASHI)
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：1550120727
増本 浩子 (MASUMOTO HIROKO)
神戸大学・文学部・教授
研究者番号：10199713
濱中 春 (HAMANAKA HARU)
法政大学・社会学部・准教授
研究者番号：3267530127
山本賀代 (YAMAMOTO KAYO)
慶応義塾大学・経済学部・准教授
研究者番号：80365460
岡本 和子 (OKAMOTO KAZUKO)
大東文化大学・外国語学部・講師
研究者番号：50407649
北島 玲子 (KITAJIMA REIKO)
上智大学・文学部・教授
研究者番号：10204893
桑原 聡 (KUWAHARA SATOSHI)
新潟大学・人文学部・教授
研究者番号：10168346
クラヴィッター、アルネ (KLAWITTER, ARNE)
京都大学・総合人間学部・外国人教師
研究者番号：90444778
オトマー、エーファ (OTTMER, EVA)
福岡大学・人文学部・外国人教師
研究者番号：70423506